

堤人形と松川ダルマ

—仙台市堤町 佐藤吉夫氏に聞く—

笠原信男（東北歴史博物館）

はじめに

1 堤人形・堤焼

2 松川ダルマ

おわりに

はじめに

宮城県仙台市青葉区堤町は宮城県庁舎や仙台市役所庁舎から北へ2 kmほどの場所にある。江戸時代は仙台北下の北端で、城下に持ち込まれる商品から税金を取る番所、御仲下改所が置かれていた。町中を奥州街道が通り、仙北と城下を繋ぐ交通の要衝で、武士や足軽・職人が住んだ。足軽たち次第に内職を行い、陶器の堤焼及び土人形の堤人形の産地として知られるようになった。現在も堤人形と仙台張子の主流である松川ダルマを製作する職人がおり、伝統産業の町としての面影を伝えている。これらの製品は昭和57、59、60年に宮城県の伝統的工芸品として指定を受け、平成28年度には日本遺産「政宗が育んだ“伊達”な文化」の構成文化財に認定されている。

堤町の東に位置する台原周辺は良質な粘土が採取できることから、古代から瓦生産が行われていた。江戸時代における製作は陶器から始まったとされる。寛文2（1666）年に京都の寺田屋八兵衛が台原（当時は杉山台といった）に来て瀬戸物並びに瀬戸瓦類を焼いたという。あるいは元禄年間（1688～1704）に江戸から今戸焼の陶工である上村万右衛門が来て、台原で焼いたのが始まりとされている。当時の製品は杉山焼もしくは仙台焼と称されたい。以後、西隣りの堤町でも陶器が生産され、堤人形も製作された。昭和初期には民芸運動の代表者、柳宗悦が「東北を代表する民窯」と称えた。堤焼は、赤みを帯びた素地に釉薬を厚く施す点に特徴がある、特に黒の上に白の釉薬を掛けた、なまこ釉は独

特の風合いがある。

現在、堤町は仙台市街地として都市化が進み、住宅が密集しており、かつての面影はほとんど感じられなくなっている。どこに製品を焼いた窯場があったのかも分からない状況である。

この度、堤町に生まれ、育ち、長じては堤人形・松川ダルマ製作を行っている、佐藤吉夫氏（昭和11年4月27日生）から、氏が見てきた堤町の様子について聞くことができた。話は庄子晃子東北工業大学名誉教授とともに伺った。日にちは平成27年2月1日及び2月15日、場所は氏の店舗兼工房の「つみのおひなっこや」である。以下に項目毎に整理してその内容を紹介する。

1 堤焼・堤人形

現在、堤焼を製作した登窯は佐藤吉夫氏の実家である佐大商店に一基あるのみである。この窯は大正7年に築いたものである。登窯は釉薬を掛けて製作する堤焼用でこれを本焼きといった。登窯は本焼とともに、焚き口から最も離れた奥の部屋で素焼きの堤焼（黒物）や着色する前の堤人形も焼いた。堤町には登窯だけでなく、素焼き・堤人形用の小さい窯もあつ



図1 佐藤吉夫氏

た。堤町で生まれた佐藤吉夫氏は家の周りが遊び場であったこともあり、どこにどんな種類の窯があったかを覚えており、やきものの町、堤町の数少ない証言者である。

今回、堤町にあった窯について、現地を案内して説明を受けた。その場所を記したのが第2図、説明したのが第1表である。数は大きい登窯17基、小さい一つ窯45基、合わせて62基であった。

(1) 粘土採掘

台原に良質な粘土があり、昭和29年1月25日に開院した東北労災病院が建つまではその粘土を使っていた。

また、昭和30年代まで仙台市青葉区赤坂でも粘土を掘った。富谷市でも掘ったが、粘土の質があまり良くなってすぐにやめた。掘る時は山を買った。

(2) 堤人形

①五福神・七福神

堤焼の七福神(大黒天・恵比須・弁才天・毘沙門天・布袋和尚・寿老人・福祿寿)は、もと五福神(大黒天・恵比須・弁才天・毘沙門天・布袋和尚)を作っていた。寺から五福神を飾りたいと来たことがある。土型は江戸時代のものが残っている。大きさは縦8寸(約24cm)ほどである。

②芥子ビナ

高さが10cmにも満たない芥子ビナには手が有ると無いのがある。手が有るのは子宝祈願のお守りになった。仙台市青葉区大町の鬼子母神で芥子ビナを飾っていて、子どもがほしい人は一つ借りて行き、子どもが生まれると、二つ返した。これを倍返しといった。仙台市青葉区大倉の定義如来西方寺にも芥子ビナ倍返しの風習があった。仙台市の北、黒川郡大衡村から、東隣りの鹿島台町へ行く途中の鬼子母神でもこの習いが行われていた。岩沼市の竹駒神社の初午でも売った。

手が無いのは便所神である。この型に「文化」の年号が入っているものがある。

③東北産業博覧会

昭和3(1928)年に開催された東北産業博覧会(仙台市青葉区、現在の西公園で開催された)で「堤」

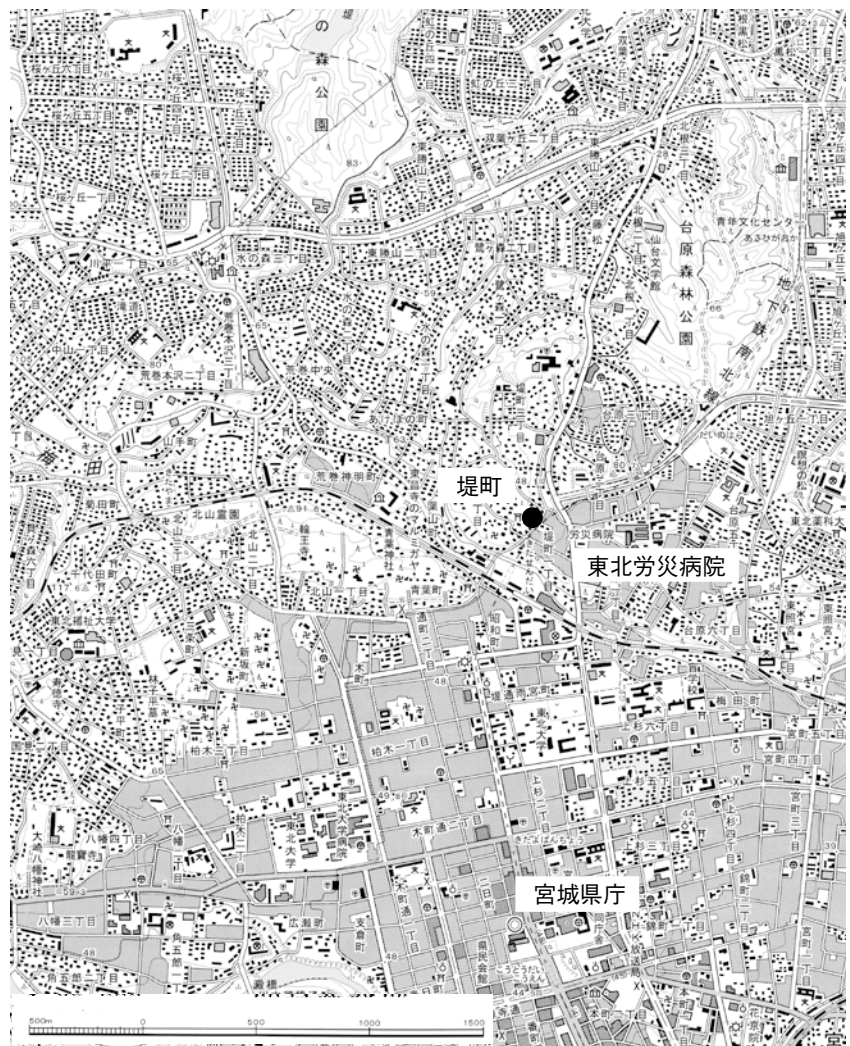


図2 仙台市堤町の位置

(図3は紙面のみでの公開となります。最寄りの公立図書館にお問い合わせの上、
閲覧なさってください。)

図3 堤町・台原の窯跡(佐藤吉夫氏による)

表1 堤町・台原の窯跡一覧 (佐藤吉夫氏による)

番号	所在地	登 窯	ひとつ窯	備 考
1	堤町1-10-10	6連、南北方向	1 高橋栄五郎	2 登窯の上にひとつ窯、、曾祖父の頃。
2	堤町1-10-15		萩原長三郎	1 小さい窯。
3	堤町1-10-15			1 電柱脇の窯よりやや大きい。
4	堤町1-10-16			1
5	堤町1-10-25西			1
6	堤町1-10-28			1
7	堤町1-9-5		1	
8	堤町1-9-12		栗林直助	1
9	堤町1-9-16		芳賀佐五郎	1 現在、堤町3丁目の「堤人形製造所」で製作。
10	堤町1-9-34	4連、南北方向	1	窯名不詳。
11	堤町1-7-68			1
12	堤町1-7-64	7連、南北方向	1	1 庄子乾馬の弟子、宍戸惣太郎窯。
13	堤町1-7-64北	東西方向	1	1 庄子乾馬の弟子、宍戸惣太郎窯。
14	堤町1-8-5	5連、東西方向	1	菊地三四郎窯。手前に自宅、奥に工場と窯。
15	堤町1-8-11	東西方向	2	庄子乾馬窯。
16	堤町1-8-16	7連	1	針生家→松根貞真→升川家窯。7連目は小さい。
17	堤町1-8-28		宇津井常隆	1 人形製作の宇津井家の窯。江戸時代に廃業。
18	堤町1-8北	5連、東西方向	1	2 松根生吾窯。手前に人形型を敷いた。
19	堤町1-11-38	6連、東西方向	1	2 登窯手前と奥にひとつ窯、大正7年造。現存。
20	堤町1-11-11		1	佐藤九平治窯。
21	堤町1-11		蜂谷勝治	1
22	堤町1-11		中野仁治郎	1
23	堤町1-11-7			1
24	堤町1-11-45		中野大治	1
25	堤町1-11-10		佐藤吉夫	4
26	堤町1-10-12	7連、東西方向	1 蜂谷家	2 蜂谷家窯、昭和40年前後に登窯を壊した。
27	堤町1-10-18			2
28	堤町1-10-52	7連、南北方向	1	幅が一番大きい。大野養之助→菊田祐安窯。
29	堤町1-10-32・33			2 持ち主不詳。
30	堤町1-10-32・38			1
31	堤町2-3-13	6連、	1	菊田誠力・祐安窯。
32	堤町2-4-17		板垣	1
33	堤町2-4-14			2 寺の土地を借用。
34	堤町1-10-19		田野崎	1 天神社の西(裏)。
35	堤町1-11-18		松根勝治	1
36	堤町1-10-68		松根金之助	2 焙烙用と黒物用。
37	堤町1-10-66			2
38	台原4-2-18東		窯業研究所	3
39	台原4-2-23・28	6or7連、南北方向	1	仙台市の窯、会津本郷から来た職人。
40	台原4-5-12			1
41	台原4-5-7	5or6連、東西方向	1	栗林窯。
			17	45
計			62	

と刻印を入れた堤人形が売られた。この堤人形は賞を受けた。しかしこれは京人形に近いものであったらしく、天江富弥（仙台市の児童文学研究家、郷土史家。昭和3（1928）年に『こけし這子』を刊行して、東北の玩具やこけしを全国に紹介した）や三原良吉（仙台市出身の郷土史家）が、「これは本来の堤人形ではない」と言っていたという。

④宇津井家の土型

大正期に佐藤吉夫氏の父、大吉が宇津井家の土型と屋号をそっくり受け継いだ。宇津井家は堤町きつての旧家で、「おひなっこや」として堤人形を製作していて、「おひなっこや」といえば宇津井家とされた。佐藤家はその宇津井家の屋号を受け継ぎ、「おひなっこや」としていたが、今は「つつみのおひなっこや」にしている。

宇津井家の土型は近所の松根金之助も借りていた。金之助は春に焙烙等の焼き物（黒物）を作り、冬はフルイ（篩）・ミ（箕）・セイロ（蒸籠）の修理をおり、昭和40年代まで大崎市古川あたりまで回っていた。

堤町でフルイなどの製作をした家が松根金之助を含めて4軒あった。金之助の弟も一時、従事したが、金之助より早くやめて、石垣積みになった。修理の材料に使ったタケやヤマザクラの皮は近所にあった。ソメイヨシノは細工に向かない。

佐藤吉夫家は宇津井家の土型のほか、針生祐藏家の土型もある。

⑤堤人形と博多人形の土型の違い

天江富弥は昭和8（1933）年に堤人形の現状について以下のように述べている。

堤人形は無茶苦茶になって了った、全国土偶中第一位に数えられるべき堤人形も、まるで駄目になって仕舞った。これは一に県当局の指導が、無茶であった為だ、堤本来の精神を没却して、まるで見当違いの指導をした為である。大正11年、全然系統異いの博多人形師を、聘して堤人形の復興改善を期した県当局の無智は、堤町に於て博多人形を作らしめ、ほんとうの堤人形の姿を完全にこの世から没せしめた。（天江1933、p.281）

堤人形と博多人形は土型が違う。堤人形一体を製作するための土型は表型と裏型の二つだが、博多人形の型は手や頭、胴部などに分かれ、一体に複数の土型がある。

2 松川だるま

(1) 佐藤吉夫家の仕事

祖父は大正7年に登窯を築いた佐藤大助（佐大商店）で、堤焼や人形製作を始めた。父の大吉が今の

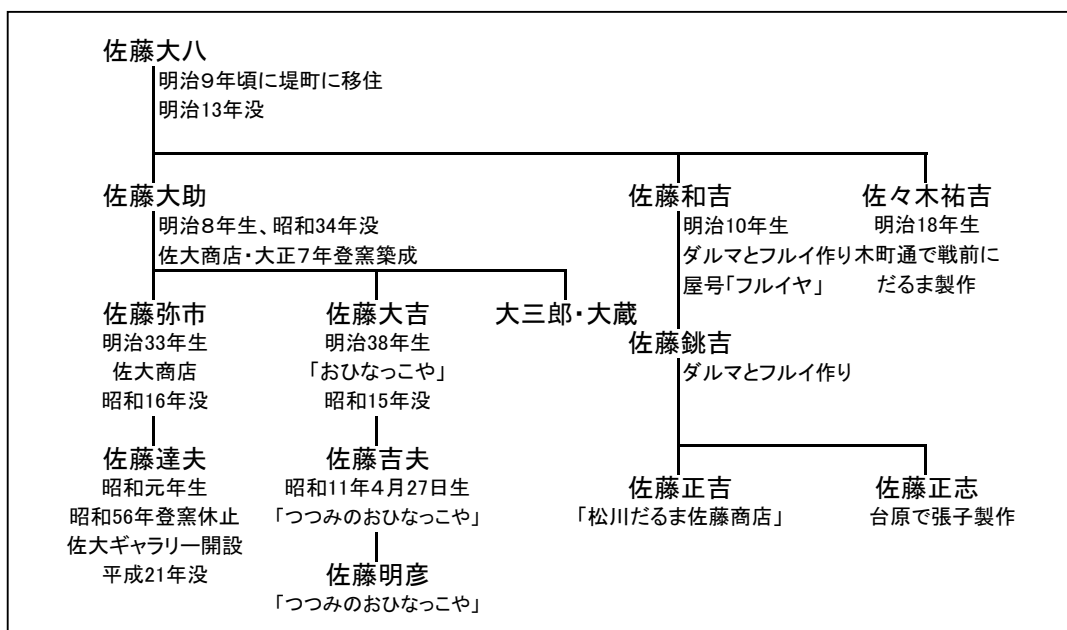


図4 「佐大商店」・「つつみのおひなっこや」・「松川だるま佐藤商店」の系譜

店を始め、叔父の大三郎が継ぎ、吉夫氏は三代目で、堤人形とダルマの製作を十二、三歳から始めた。仕事は叔父の大蔵から覚えた。

佐藤吉夫氏の叔父、大三郎は昭和3 (1928) 年に仙台市で行われた東北産業博覧会にダルマ (鯉の滝昇り) を出品して賞を受けている。このダルマの木型は三代目面徳、高橋利三郎のデザインである。

叔父の佐藤大蔵は仙台市宮城野区榴ヶ岡にあった窯業学校に通った。今の仙台管区气象台 (仙台市宮城野区五輪に所在、詳細は不詳) のあたりに大正から戦前までであった。大蔵が学校で型抜きした石膏レリーフが残っている。小さい猫は火消し瓶に入れて、一つ窯の前に置き、温度が1,000度になる前に瓶をひっぱりだした。それを冬まで貯めて、冬に絵付けした。登窯でも焼いた。販売は佐大商店と一緒にした。

佐藤家による松川ダルマは実家である佐大商店の佐藤大助が明治に作っている。今、佐藤吉夫家の店舗「つつみのおひなっこや」の場所に当時、佐大商店のワラ小屋があり、その二階でダルマや焼き物を作った。ダルマ木型は江戸時代に柳町で製作していた菊地だるま屋の型を使っている。それに高橋利三郎の面徳ダルマの木型がある。

火伏せダルマは松川ダルマと木型が違う。大・中・小の木型があったが、今あるのは大・小のみである。この木型はどこから来たかわからない。ダルマも江戸時代から作っていたという。

ダルマは沿岸部の人たちが縁起を担ぐので県南の亘理町から岩手県陸前高田市で多く売れた。面徳ダルマは恵比寿や宝船を立体的にしたものだが、それ以前は赤いダルマに金色で彩色した。松川ダルマは青色で目がついているのが特徴で、青色は坊さんの袈裟頭巾を表している。

①年間製作スケジュール

- 1月～3月 堤人形 (雛) 製作
(1/下旬～3/3まで)
- 6月～10月 堤人形 (一般) 製作
- 9月～11月 堤人形 (正月の干支) 製作
- 11月～1月 ダルマ製作 (1/14まで)



図5 窯業学校で製作した石膏レリーフ

②ダルマ販売

昔は女川町・石巻市・角田市に卸していた。石巻市は大型トラック3台、角田市は2台で行った。今は直売している。名取市関上は平成23年の東日本大震災前まで出したが、津波で、売っていた人が流されてしまった。

神社には直接出向いて売こともあった。賀茂神社 (仙台市泉区七北田上谷刈字古内糺)、八坂神社 (仙台市宮城野区岩切字若宮前)、青麻神社 (仙台市宮城野区岩切字青麻沢) などで売った。青麻神社は定義 (定義如来西方寺 仙台市青葉区大倉字上下) と一緒に回って参拝するものとされていた。

神社に頼んで売ることもあった。陸奥総社宮 (多賀城市市川字奏社)、神明社 (白石市益岡)、白鳥神社 (柴田町船岡字内小路)、大高山神社 (大河原町金ヶ瀬字神山) は頼んだ。最近ではイオンモール石巻 (石巻市茜平) で売ってもらっている。数は少ないところで100個、多いところは500～600個にもなった。

陸奥国分寺薬師堂 (仙台市若林区木の下) も1月14日に売っている。今は青色の松川ダルマを売っているが、昔は高さ7.5cmほどの小さい赤ダルマだった。平成26年から神社のものを焼いてはダメと言われた。古いダルマを納めて新しいダルマを買ってもらう。納めたダルマはお祓いに3,000円といわれ、15日に大崎八幡宮 (仙台市青葉区八幡) で焼いた。東照宮もヌイグルミ等はお金をとっている。

県内の作り手は佐藤吉夫家の「つつみのおひなっこや」と本郷だるま屋 (仙台市青葉区柏木)、それに佐藤家の親戚でもある、松川だるま佐藤商店 (佐藤吉夫家と親戚、仙台市青葉区堤町二丁目) の三軒で、



図6 面徳系ダルマ(菊地1964、p.203より)
胴文様は「火焰宝珠に鬘斗」。

大崎八幡宮(仙台市青葉区八幡)でのみ三軒が直売している。以前は四軒あり、大崎八幡宮ではその規約で四軒とも境内の上に並んで売っていたが今は本郷だるま屋が上の長床前で売っている。本郷家のダルマ作りは古い。明治維新まで武士であった。その後、瓦屋をし、冬にダルマを製作した。明治に青葉区柏木に来た。明治でやめた人の型を使い、足りないのを「メントクオヤジ」に作ってもらった。

堤町の歴史等に詳しい関善内は以下のように記している。

本郷家の達磨の型も昔の松川型から面徳型の普及するに及んで、面徳の彫った木型になったといわれ、徳治実弟である大波軍哉の型もすべて面徳の作であり、あらためて今日の仙台達磨の変遷に大きく貢献した面徳が偲ばれる。(関1966、p.14)

③佐藤大吉・大三郎の販売

白石市の白鳥神社にダルマを持って行った。当時、白石川に橋がなく、船で渡った。帰りは村田町を回り、蔵王町宮で残ったダルマを売りながら1週間くらいかけて戻った。叔父で、吉夫氏の父、大吉の家業を継いだ大三郎は若くして亡くなった。

④信仰と堤焼・堤人形

「すり鉢」は頭病みの人が寺社に納めた。「瓶」も同じである。芥子は赤ちゃん祈願、小さな赤ダルマは病気除け、陸奥国分寺薬師堂で昭和25年頃、400個とたくさん売れた。赤芥子ほどの大きさの張り子

場 所	業 者	系 統
通 丁	本郷徳治一家	(松川系)
通 丁	大波軍哉(徳治実弟)	(松川系)
北目町	面徳	(面徳系)
原ノ町	松木一家	(松川系)
花京院	芳賀盛	
木町通	佐々木祐吉	(面徳系)
東三番丁(柳町)	菊地一家	
	今野一家	
	日野一家	
堤 町	佐藤大助	(面徳系)
堤 町	佐藤和吉	(面徳系)

図7 大正のダルマ業者(関善内1966、p.2より)
系統は筆者記入。

で、一つ借りて、戻す時に二つにする。今年は2月11日に薬師堂の本堂に納めた。

陸奥国分寺薬師堂のダルマについて、郷土史家の三原良吉が以下のように記している。

「(1月)7日朝観音夕薬師、元寺小路の観音堂と木の下薬師堂の開帳日で」、「薬師堂の開帳を七日堂と称し」、「奉納の張子の達磨をかりて堂の階段をころがして持って帰ると子供が丈夫に育つといい、翌年一対にして返す」という。(三原1952、p.41)



図8 「つつみのおひなっこや」の店頭に飾られたダルマ
 (左から面徳系(宝船)・面徳系(大黒)・火伏ダルマ・面徳系(大黒)・福助ダルマ・面徳系(宝船))

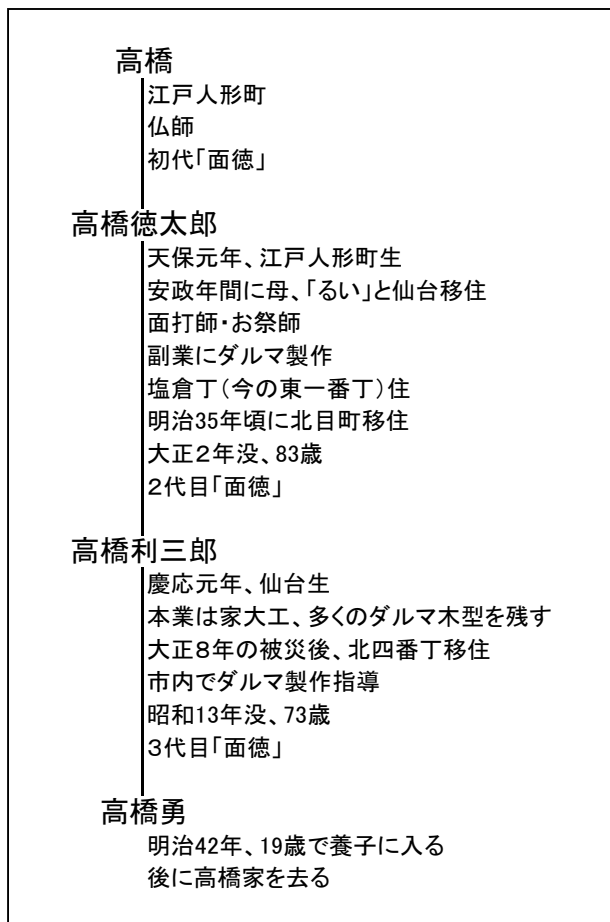


図9 高橋家(面徳)の系譜
 (関善内1966、p.6-11を図化)



図10 面徳系ダルマのガラス製の目

を製作した。面徳の木型は他にもいっぱいあるが、売れないので大黒を中心に作っている。

②ダルマ・張り子

齋藤という東北大学正門近く、柳町の人が江戸のダルマを持ってきた。江戸のダルマは肩が張っていて、三春のダルマに似ている。

戦前はダルマの目にガラスを使った。耳の付いたダルマもあった。目が悪い人はガラスの目、耳の悪いひとはダルマの耳を撫でて平癒を祈った。ダルマ

の耳は戦後になくなり、木型に付いていた耳を落とした。

父、佐藤大吉の「鷹」の木型を昭和40年頃、本郷家に貸したことがある。羽を広げた鷹で、40cmほどの大きさで目にガラスを入れ、黄色で着色する。張り子で中に竹ヒゴが入っている。

おわりに

窯跡は堤町を象徴する産業の記念物であるが、現在はどこにどれくらいあったのかが不詳のままであった。今回、本焼き窯と小さな一つ窯を合わせて、60基以上の窯跡が存在することが判明した。すでにこのことを記憶している人は少ないと思われる、松川ダルマや堤人形の記憶と合わせ、貴重な記録となることを願うものである。

なお、本稿を記すにあたり、便宜のために松川ダルマの関係年表を作成した。参考にしていただければ幸いである。

佐藤吉夫氏には2日間、朝から夕方まで、途中で昼食をはさんで、話を伺った。窯跡は、住宅やマンションが林立している隙間を縫って、現地を案内していただいた。改めて感謝申し上げます。



図11 ダルマ各種(左から 面徳系(大黒)・面徳系(宝船)・赤ダルマ・面徳系(富士山)・三角ダルマ)



図12 面徳系ダルマ (左から恵比寿大黒・富士山・鯉の滝昇り・燕)



図13 面徳系ダルマ (左から鯉の滝昇り・一富士二鷹三茄子)

眉はかつて犬毛を使ったが、最近では化学繊維を用いている。国連防災会議 (H273.14 ~ 3.18) での展示用に製作し、会議後にフランスへ寄贈された。

表2 堤人形・松川ダルマ年表

和 暦	西 暦	事 項	文 献
天保		仙台藩士、松川豊之進が仙台のだるまを創始する(1833~1844)。	仙台市2010
慶応	4 年 1868	松川豊之進らが奥羽鎮撫総督府参謀、世良修蔵を暗殺する(慶応4. 閏4. 20)。	
明治		明治以降、二代目面徳、高橋徳太郎がお祭師の傍ら、塩倉丁(現在の東一番丁)でだるまを製造し、「仙台達磨」として世に出す。	関1966
	34 年 1901	この前後、二代目面徳一家が北目町に移住する。	関1966
	44 年 1911	清水晴風が『うないの友』で「仙台産松川達磨、伊達の藩士松川豊之進という人の達磨を作り発売せしものなり」と記す。	清水1911
	末 年	原町でだるまの小売りをしていた松木家为本郷家の指導を受けて、だるま製造を始める。	関1966
大正	初 年	佐藤和吉が長男の銚吉と次男の豊吉に三代目面徳、高橋利三郎を迎えて、だるま作りを学ばせ、家業として製造と販売をする。	関1966
	年	佐藤大助が宇津井家の堤人形土型と屋号「おひなっこや」を受け継ぐ。	聞取
	年	原町の松木家がだるま製作を廃業し、木型一切を東三番丁の菊地骨董屋(副業でだるま製作をしている)に譲渡する。	関1966
	7 年 1918	三代目面徳、高橋利三郎がだるま木型一切を堤町(木町通?)の佐々木祐吉(佐藤大助末弟)に売り、師匠として製作法を伝授する。	関1966
	8 年 1919	北目町の面徳家が延焼する。一家は後に北四番丁へ移住する。	関1966
	11 年 1922	宮城県が博多人形師を招き、堤人形の復興、改善を期す。	天江1933
	末 年	佐藤大助が東三番丁の菊地家よりだるま木型一切を譲られる。	聞取・関1966
	末 年	佐藤大助、次男の大吉に三代目面徳、高橋利三郎を迎えてだるま作りの伝習を受けさせ、製造を始める。	関1966
年	仙台のだるま製作者 11 軒。通丁：本郷徳治一家・大波軍哉(徳治実弟)、北目町：面徳、原ノ町：松木一家、花京院：芳賀盛、木町通：佐々木祐吉、東三番丁：菊地一家・今野一家・日野一家、堤町：佐藤大助・佐藤和吉	関1966	
昭和	3 年 1928	東北博覧会で堤人形及び佐藤大吉のだるま(鯉の滝昇り)が賞を受ける。	聞取
	8 年 1933	天江富弥が『宮城県の全貌』に「仙台の土俗玩具」を著し、「松川達磨」・「堤人形」・「黒面」等を記す。	天江1933
	20 年 1945	木町通の佐々木家(佐藤家別家)がだるま製造をやめる。佐々木家は面徳家の木型を大正7年に購入していた。	仙台市1985
	29 年 1954	台原で東北労災病院(S29. 1. 25開設)が建つまで粘土を掘った。	聞取
	39 年 1964	菊地勝之助が『仙台事物起源考』で「松川達磨のはじめ」を記す。	菊地1964
	41 年 1966	だるま製作は4軒(柏木の本郷・大波、堤町の佐藤2軒)で行われている。	関1966
	41 年 1966	関善内が『仙台達磨』を著す。	関1966
	59 年 1984	「堤人形」が宮城県知事指定伝統的工芸品の指定を受ける(H59. 2. 16)。	
	60 年 1985	「仙台張子」が宮城県知事指定伝統的工芸品の指定を受ける(H60. 5. 22)。	
60 年 1985	仙台市歴史民俗資料館が「堤焼」・「堤人形」・「松川ダルマ」を調査し『堤町周辺の民俗』を刊行する。	歴史1985	
平成	4 年 1992	堤町まちがたり編集委員会が『堤町まちがたり』を刊行する。	堤町1992
	11 年 1999	堤人形土型 292点が仙台市指定有形文化財になる(H11. 2. 1)。	
	15 年 2003	堤人形土型1759点が仙台市指定有形文化財になる(H15. 3. 25)。	
	22 年 2010	仙台市教育委員会が「堤焼」・「仙台張子」を調査し、『仙台旧城下町に所在する民俗文化財調査報告書』を刊行する。	仙台市2010
	24 年 2012	東北大学東北アジア研究センターが『よみがえる町の記憶—通丁・堤町・北山界隈の歴史—』を刊行する。	東北大2012
	28 年 2016	「仙台張子」・「堤人形」・「堤焼」等を含む「政宗が育んだ“伊達な”文化」が日本遺産に登録される(H28. 4. 25)。	

参考文献

- 天江 富弥 1933「仙台の土俗玩具－松川達磨・堤人形・こけし・黒面－」『宮城県の全貌』宮城県人社会
大谷 美紀 2000「だるまと見てきた泣き笑い」『別冊 東北学』Vol. 1 東北芸術工科大学東北文化研究センター
- 菊地勝之助編 1964「松川達磨のはじめ」『仙台事物起源考』郵辨社 pp.203
- 佐藤 雅也 1996「仙台の柳生和紙と松川達磨」『足元から見る民俗』(15) 仙台市歴史民俗資料館調査報告書第25集
- 清水 晴風 1911 「仙台産松川達磨」『うなるの友』第五編
関 善内 1966『堤焼之史』堤焼研究会
関 善内 1966『仙台達磨』吉田慶二監修
関 善内 1967『堤土人形』郷土玩具研究会
関 善内 1974『堤焼と陶工たち』萬葉堂書店
- 仙台市教育委員会 2010「堤焼」『仙台旧城下町に所在する民俗文化財調査報告書②－堤焼－』仙台市文化財調査報告書第375集
- 仙台市教育委員会 2010「仙台張子」『仙台旧城下町に所在する民俗文化財調査報告書③－仙台張子・鍛冶屋－』仙台市文化財調査報告書第375集
- 仙台市史編さん委員会 2001『仙台市史』資料編6 近代現代2 産業経済
- 仙台市博物館 1974『東北の古人形展図録』
仙台市博物館 1989『堤人形延び』
仙台市博物館 1996『みちのくの人形たち－三春・堤・花巻・相良－』
仙台市歴史民俗資料館 1981『土と炎の芸術展－仙台堤焼と堤人形－』
仙台市歴史民俗資料館 1985『堤町周辺の民俗』仙台市歴史民俗資料館調査報告書第6集
堤町まちがたり編集委員会 1992『堤町まちがたり』仙台市三本松市民センター
- 東北歴史博物館 1995『仙台・堤のやきもの』
日本郷土人形研究会編 1991『堤人形』郷土人形図譜創刊号 芳賀佐五郎・桜井 広平 1931「堤人形」『仙台郷土廻り』第2輯
- 平川 新編 2012 『よみがえる町の記憶－通丁・堤町・北山界隈の歴史－』東北大学東北アジア研究センター
- 藤 智仁 2005「松川だるまの民族誌」『東北人類学論壇』4号 東北大学大学院文学研究科人類学研究室
- 三原 良吉 1952「仙台民俗誌」『仙台市史』6別編4
四世針生 乾馬 2005『堤焼乾馬窯 四世針生乾馬』笹氣出版